

# 感動経験が想起される文脈と機能の検討

—大学生の自伝的記憶としての視点から—

○橋本 巖・井石田優華

(愛媛大学大学院教育学研究科・伊予市立郡中小学校)

## 目 的

あるとき経験した感動が一過性・一回性の感動で終わらず、記憶に残って自発的に、あるいは不随意的に(神谷, 2003 他), 思い出されることがある(=自伝的記憶としての感動経験)。さらに, 能動的に「繰り返し思い出され参照され(佐藤浩一, 2000)」、生活・人生において様々な役割や効果を及ぼしたと回想報告されることもある。従来, 自伝的記憶一般に関しては, その様々な役割や効果が, 「機能」と呼ばれて研究されているが, 従来の感動経験に関する感情心理学的な研究では, 直接体験ではなく, 想起された感動経験に焦点づけて検討してこなかった。そこで本研究は, 感動経験想起の心理的機能を検討するため, 大学生対象の質問紙調査により, 印象的な感動経験が想起される文脈や, エピソードの自伝的記憶としての特徴と, 感動想起による機能との関連を探索的に分析した。

## 方 法

**調査手続と参加者** 対面式の配布またはインターネットを介した無記名式により, 計 205 名から回答を得, 分析には 199 名(男性 86 名, 女性 109 名, 性別回答しない 4 名, 平均年齢 19.9 歳)を対象とした。フェイスシートに倫理的配慮を記載し, 提出を持って同意と判断した。2022 年 12 月～2023 年 9 月にかけて実施。

**質問紙冊子の概要** 1. 感動経験累積尺度(橋本・小倉, 2002)からの抜粋(3 因子想定, 15 項目)を手がかりとして提供して先に評定してもらい, それらも参考にして「(1)自分の印象的な感動経験を 1 つ想起させ自由記述(筆記)を求めた。

2. 上記 1 で想起記述した感動経験に関して, 以下(2)～(8)の設問に選択評定で回答してもらった:(2)原感動出来事での感動の程度(4 件法), (3)感動出来事の時期(小学校以前, 小, 中, 高, 大(5 件法)), (4)想起された感動出来事の鮮明度(4 件法), (5)想起頻度(3 件法), (6)感情の再現度(4 件法)。※(2)～(6)は各 1 項目。(7)出来事を通常想起する場合の文脈(自己の心理的状況)。18 項目。2 因子想定(文脈 1: 動機づけ・情動の調

整欲求がある状況(=想起意図あり)での想起/文脈 2: 内的な感動想起による自己調整欲求は不明確で, 外的手がかり等により過去の回想が生じて感動体験想起が生じた場合)。(8)その感動経験を想起することが自己にとって果たしている機能(自己理解の変化, 情緒的变化)。15 項目。3 因子想定(動機づけ喚起, 不安解消等の気分改善, 自己確認(自己の「大切なこと」の再認識))。

## 結果及び考察

**想起された感動出来事の種類** 1. 感動経験の自由記述は, 橋本・小倉(2002)を参照して次の 3 つに分類(1)「絆・達成・被受容」(自己が主体), 90 名, (2)「他者の奮闘や一貫した姿」(自己は観察者の視点), 50 名, (3)自然・芸術・技術の素晴らしさ等, 59 名)。2. 想起時期との関連では, 大学, 高校時期の経験想起が多く, 中, 小と少ない。高校時期は, 特に自己主体のカテゴリ 1 が多い。3. 記憶特性(2)～(6)については, (2)感動程度のみにおいてカテゴリ 1>2 という有意差が示された。

**想起の文脈尺度, 機能尺度の因子分析と平均値の検討** 1. 主因子法プロマックス回転より, 文脈(2 因子), 機能(3 因子)とも所期の因子抽出と判断した。2. 感動出来事カテゴリ(1 要因 3 水準)の分散分析から, 内的制御欲求のある場合には, カテゴリ 1=2>3 の順で想起されやすく, 外的手がかりからの回想時の感動想起は, カテゴリ 1>2=3 であった。3. 機能尺度 3 因子に関する出来事カテゴリによる分散分析の結果, 動機づけの喚起機能において, 感動カテゴリ 1=2>3 の有意差が見られ, 想起文脈でのカテゴリ差と対応する点が興味深い。また自己確認機能では, 感動カテゴリ 1>3 という有意傾向が示唆された。

**感動想起の文脈因子および諸記憶特性が感動想起の機能に及ぼす影響(重回帰分析)** 全体及び各カテゴリ想起者別に上記の重回帰分析を実施した結果, 記憶特性(2)～(6)の機能への有意な影響はほぼなく, 動機づけ等の内的調整欲求のある因子 1 がどの機能をも促進すること, 機能 3 自己確認では回想時の想起時が有意と示された。